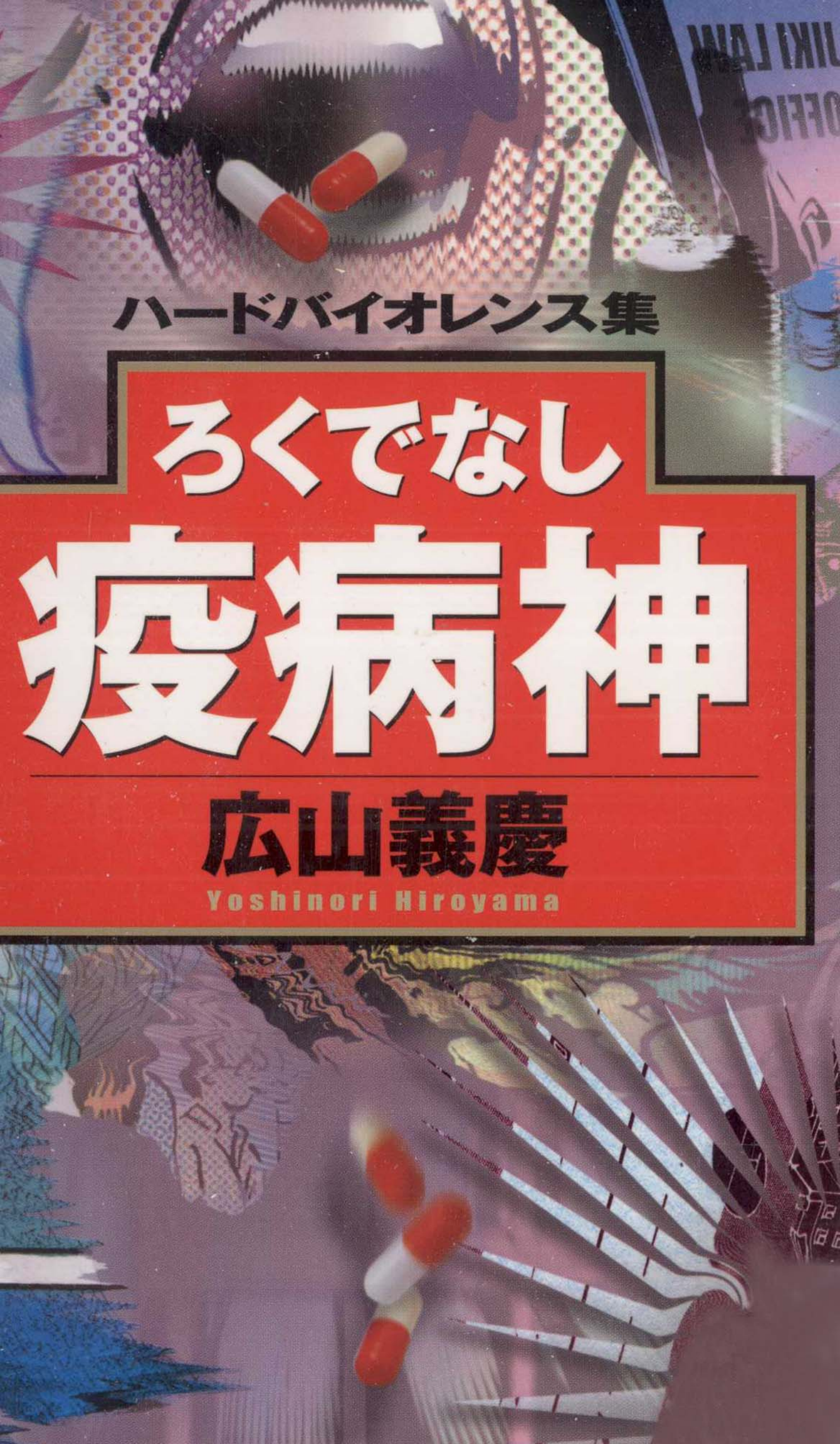




ハードバイオレンス集

ろくでなし

疫病神

広山義慶

Yoshinori Hiroyama



TOKUMA NOVELS

広山義慶

ろくでなし 疫病神

発行者 松下武義

発行所 徳間書店

東京都港区東新橋一ノノ一六 一〇五―八〇五五

電話〇三・三五七三・〇一一

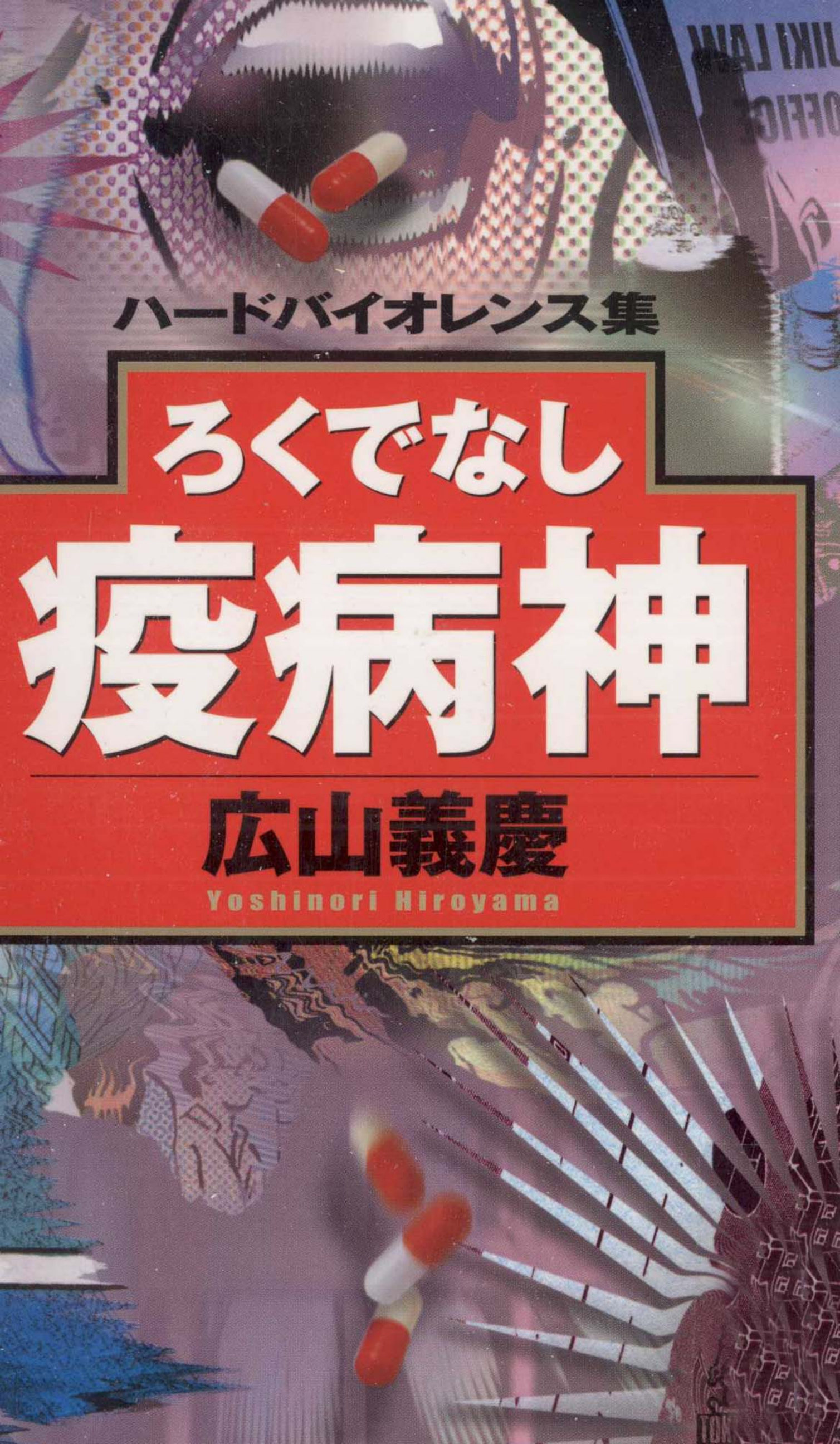
振替〇〇一四〇〇―四四三九二

©Yoshinori Hiroshima 2001 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 磯谷 励〉

ISBN4-19-850534-9



ハードバイオレンス集

ろくでなし

疫病神

広山義慶

Yoshinori Hiroshima

ハードバイオレンス集

ろくでなし 疫病神

広山義慶



徳間書店

TOKUMA NOVELS

目次

蒼い夜

7

疫病神

34

酔いどれ

60

路上の天使

87

迷宮の女

114

幻の白いアナ

140

ストーカーいじめ

167

クソ爺い！

194

蒼い夜

1

どういうわけか、その日は一日中、俺にツキはなかった。正午過ぎに府中の競馬場の門を潜ったときには、ツキの女神が俺の背中で微笑^{ほほえ}んでいるという実感があつて、俺は夢と希望に胸をふくらませていた。いつもと何も変わらなかった。俺は競馬場や競輪場、あるいは雀荘や秘密カジノの入口を潜るときは、いつだってツキ

の女神は俺の恋人という気分で自信満々だ。そして出て来るときは常に夢と希望と自信の結果がポケット一杯に詰まっている。

俺？

三橋玄章、三十七歳。味木法律事務所の調査員。

並みの調査員じゃない。

昔、警視庁の華の捜一の腕っこき刑事だったが、尻の青いキャリアの偉いさんを半殺しの目に遭わせて警視庁を叩き出されたところを、味

木という怪物みたいな老弁護士に拾われたってわけだ。

警察官というタガを外されて、俺は本来の自分を取り戻したね。

飲む・打つ・買う。

刑事時代には遠慮しながらやってたことを、思い切りやったね。そう。羽根を伸したってわけだ。イソ弁二十人に十人の調査員、五人の事務員を抱えた味木法律事務所内で、俺はたちまち「ロクデナシ」と噂された。

ロクデナシ——こいつは警視庁を叩き出されたときに、俺の額に貼られたレッテルだ。

そう。俺はロクデナシよ。桁外れのロクデナシよ。

おまけに強いぜ。俺の腕力ときたら、自分で

もぶったまげるような破壊力を発揮する。その上に、飲む・打つ・買うも強いときている。

特にギャンブルは負け知らずだ。味木法律事務所に入りたての頃、イソ弁どもが寄ってたかって俺を麻雀でカモろうとした。むろん弁護士などのカモになる俺じゃない。俺は欠伸あくびをしながらカモりまくってやった。いまでは誰も誘ってくれない。

「きみは根っからのロクデナシですね」

誰かが俺のことを所長に言いつけ、味木所長は俺を呼びつけて言いやがった。

「どうもそのようで」

俺は答えた。俺に責任はねえぜ。俺を拾い上げたのはあんただぜ、爺さん。

「私がきみを傭やとったのは、捜査員としての腕を

見込んだからです。ロクデナシを買ったからじやありません。ロクデナシ大いに結構。但し、外でやって下さい」

味木所長は結構話のわかる爺さまだった。なにしろ最高裁の判事まで務めた法曹界の大物でありながら、六十歳も若いお姐ちゃんを愛人にもち、週に三回は励んでいるという怪物じみた爺さまなんだ。

それになんと言つても、俺を拾ってくれた恩人だ。恩人の忠告を無視するわけにはいかねえ。外でやったね。やりまくったね。

飲む・打つ・買う。

何が面白いかと言つて、打つほど面白いものはない。飲む・買うは、打つて金を儲けてからの話だ。

儲けたね。

競馬、競輪、麻雀——これが俺の打ち出の小槌で、ひと振りすればたちまち俺のポケットには小判がザクザク、万札が満杯になった。

振りまくったさ。仕事の合い間を見ては振り、仕事をさぼっても振った。

そして、飲んで買った。打ち出の小槌が生んでくれた万札はみんな酒と女に流れて行つた。

だから俺のポケットはいつも空っ風が吹いていた。打ち出の小槌が振り出してくれた万札は俺のポケットを素通りするだけだ。

だからまた振る。

振ればいつでも万札が束になって俺のポケットに飛び込んで来る——はずだったんだ。

それがどういうわけか、その日に限つて、そ

うはならなかった。

最初に買ったレースでケチがついたのかもしれないねえ。狙った馬が二頭いて、その二頭の一点買い。馬連で九千円というオッズだ。

来たね。来やがったのよ、その二頭が。

俺はニンマリ。味木法律事務所なんか辞めちまってギャンブラーになろうかと、本気で思ったね。なにしろ俺の手の中には、九千円の馬券が五万円分握られていたんだから。配当はメて四百五十万円。

ところがだ、レースは審議の青ランプ。

結局、二着に来了馬が走路妨害で降着になった。

そう、四百五十万円の馬券が一瞬の内に唯ただの紙屑になっちまったんだ。

俺は腹も立てなかったね。

〈ギャンブルには、こういうこともあらあな〉
まだまだ余裕たっぷりだった。こういうことがあるから、ギャンブルってのは面白おもしろえのさ。

次のレースは銀行レース。最近の銀行同様、超低金利。馬連で三百円。どう見ても荒れようがない。

しかし、レースってのはやってみなくちゃわからねえ。なにしろレースに出るのが、口を利けねえ馬だからな。馬連中が何を考えているかわかったもんじゃない。

そう思って、本命外しの馬連を五点ばかりバラして買ってみた。

結果は、本命・対抗の二頭のブッチ切り。配当は二百八十円。こういうレースは、取らねえ

ほうが名誉みたいなもんだ。

次のレースは戦国レース。無印の馬は一頭もない。馬連の一番人気で十二倍という割れよう。こういうレースは本命サイドで決まりがちなもんだ。

そこで本命からの三点買い。

今度は写真判定で一着三着。

〈ま、仕方ねえやな。これがギャンブルってもんだ〉

俺は笑って過ごした。

ところが、次のレースもまたまた写真判定で、今度は二着三着。

さすがの俺も首をひねったぜ。

〈どうも、妙だぜ〉

最近、悪いことでもしたのかな？

ツキの女神ってのは案外ナーヴァスでね、下手なことをすると、ツンつとそっぽを向きやがるんだ。

しかし、そっぽを向かれる心当りはない。女を抱いて、酒をかつ喰らって、仕事をして……何も変わったことはしていない。怒りに狂ったこともなければ、悦びに舞い上がったこともない。いつもどおり、淡々と、女と酒と仕事だ。そう。いつもどおりのロクデナシだったぜ。

なのにツキの女神はそっぽを向いている。

〈それはないぜ。こんなに愛してるのによ〉

次はメインレース。朝から狙っていたレースだ。無印の狙い馬から五万円ずつの二点買い。どっちに來ても数千円の配当だ。

〈頼むぜ、女神さんよ。帰ったら一発やってや

るからよ」

そうご機嫌をとったのに、女神の野郎ニコリ
ともしやがらなかった。

無印の馬は頭に来たんだが、ヒモの馬が三着、
四着。

「なるほど。そうかい」

俺は腹の中で呻いたね。

五十万円の軍資金がいまやパー。俺のポケッ
トには万札どころか千円札もなく、あるのはチ
ャラチャラの小銭ばかり。電車にだって乗れや
しねえ。

怒っちゃいけねえよ、玄章。人生なんてこん
なもんさ——と、俺は自分に言い聞かせ、あり
ったけの小銭——と言っても七百円だが、そい
つを最終レースにぶち込んだ。

かすりもしなかった。

そう。俺はロクデナシよ。こんなことで腹を
立ててちゃ、やってられねえぜ。

俺は口笛吹きながらゲートを潜り、タクシー
乗り場に向かって歩いた。電車賃もないから虎
ノ門の事務所へタクシーを乗りつけるしかない。
今日は日曜日だが、法律事務所に日曜も祭日も
ない。誰かしらイソ弁が出て来て仕事をしてい
る。

念のため、俺は携帯で事務所に電話を入れて
みた。

誰も出ない。

糞っ。こんな日に限って、全員お休みかよ！
家へ帰っても金はない。女のところへ乗りつけ
てタクシー代を払わせるか。

ロクデナシにはお似合いだぜ。

女と言っても、四、五人はいる。誰にしようか？

歩きながら迷っていると、甘い香水の香りが風に漂って来て俺の横に並んだ。

「味木法律事務所の三橋さんでしょ？」

見知らぬ女だった。しかし、女のほうは俺のことを知ってるらしい。

「そう。三橋玄章」

俺はニンマリとして答えたね。俺の頬がニンマリとするくらい色っぽい女だったってことだ。年齢としの頃は三十代の前半で、色っぽい上に愁いが面上に漂っている。こういう女に声をかけられ、しかも俺を知っているとだったら、優しく応ずるしかねえ。そうだろう？

「三橋さんともあろう人が、やられたのね？」

女はからかうように言った。親しみのこもった笑顔だった。

「ああ。尻ケツのケバまで抜かれちゃった」

「私は稼がせてもらっちゃった。ご馳走するわ」

俺の下品な言葉に眉をひそめる訳でもなく、女はさらに親密な笑顔で言いやがった。

2

女はクルマで来ていた。ダークグリーンダークグリーンのBMW。ブルージーンズにコットンのブラウスという女のラフな服装と較べると、かなり高級なクルマだ。乗り心地はよさそうだった。ブルー

ジーンズに包まれた尻のラインも、クッションがよく利いていそうだった。

BMWは新宿へ向かって走り出した。新宿のホテルのラウンジでご馳走してくれるらしい。ホテルのラウンジなら、ベッドも近いし言うことないね。

「ところで、あんた、名前はなんと言ったかな」

せめて名前くらい知っておかねえとこれから進行具合にひびく。

「やっぱり忘れてるのね。そうじゃないかと思つたわ」

女はちよつと咎めるような口調で言った。しかしハンドルを握った横顔が微笑わらっている。

「最近、忙しいもんでね、つい、なんだ、物覚

えが悪くなつちまつて」

「由貴乃」

「由貴乃？ ああ、そうよ、由貴乃ちゃんだ。

思い出した」

思い出さなかった。初めて聞く名のような気がした。

「なに由貴乃だっけな」

「藤代由貴乃。いやあね、ほんとに忘れちゃつたの？」

「冗談じゃない。俺は美人の顔と名前は一度聞いたら忘れねえんだ。でもな、あんまりいい尻をしてると、そっちに気を取られて、名前も顔も忘れちまうことがあるんだ」

俺の口は俺自身よりもっとロクデナシだぜ。

「相変らずね」

「そう。相変らずだ。ロクデナシにつける薬はねえらしい。しかし、今度ははつきり思い出したぜ。そう、藤代由貴乃。藤代さんちの由貴乃ちゃんてわけだ」

後は笑って誤魔化した。

どうにも思い出せねんだ。藤代由貴乃――。

これだけの美人でいい尻の持主なら、一度会えば絶対忘れるはずがないのに、記憶の箱には入っていない。俺がどこかで泥酔したときに出会っているのかね？

「それで？ 競馬場で俺の姿を見かけたってわけ？」

「馬券を破り捨ててるところを三度見たわ」

「今日はツキの女神に振られたってことだ。そのかわり、血の通った女神さんと出会えて、俺

としちゃあ、こっちの女神さんのほうがいいな」

俺の視線はコottonのブラウスの胸のふくらみからジーンズの尻へと這った。

「ねえ、私が三橋さんのこと、どう思ってるか知ってる？」

知るわけねえだろうが。俺はまだあんたの名前も顔も思い出しちゃあいないんだぜ。

「ま、食事をおごってくれるってんだから、悪く思ってるわけはねえよな」

「根っからのロクデナシだと思ってるの」

「ロクデナシ？ この俺が？」

そう。俺はロクデナシ。唯のロクデナシじゃねえぜ。天下ご免のロクデナシだ。

「最低の最低のそのまた最低のロクデナシ」